

# 中世の金融

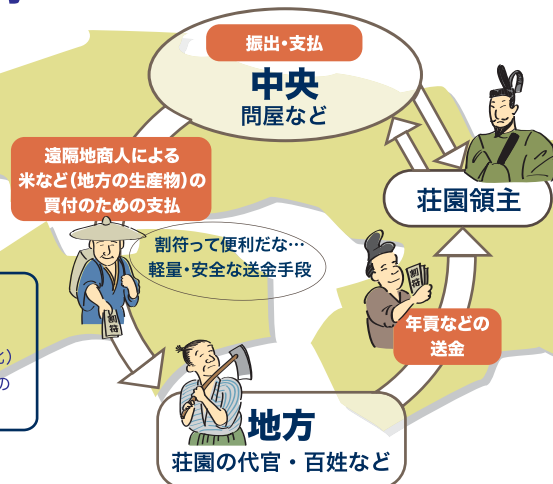
金属貨幣の空白期であった平安時代後期に、手形的機能を持つ文書が流通し、信用経済の萌芽がみられましたが、12世紀半ばに一旦姿を消しました。しかしその後の貨幣経済の浸透により、信用取引も大きな発達を遂げました。

## 中世の手形の事例 — 割符 —

割符は貨幣経済の浸透のなかで14世紀初め～16世紀初めに隔地間の送金・支払手段として機能しました。送金手段として銭貨と比べ軽量で安全であるなどの利便性から広まった中世後期に特徴的な手形です。

### 割符の特徴

- 端数がなく10貫文のものが多く(定額化)
- 不特定多数の人々の間を転々と流通(匿名化)
- 振出人の多くは、京都や堺など畿内諸都市の有力な問屋商人層(商業手形としての性格)



割符10貫文

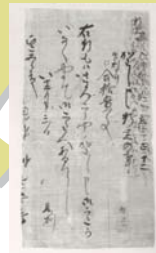
銭だと

約40kg



5貫文緒

草戸千軒町遺跡出土  
(広島県立歴史博物館蔵)



割符10貫文

(京都府立総合資料館蔵)

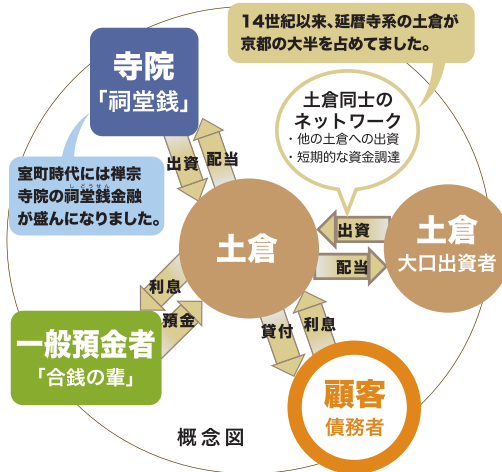
## 中世の銀行

### — 金融業者 土倉 —

貨幣経済が浸透していく中で、土倉や酒屋など高利貸しの金融業者が大きな力を持っています。土倉は貸出だけでなく預金業務も行っており、「中世の銀行」ともいえる存在でした。

### 中世の金融と寺社

中世の金融取引で、重要な役割を果たしたのが寺社でした。寺社領の荘園年貢の徴収を行った僧侶や神職の中から、高利貸し等を行い土倉として成長していく者が多く現れました。



借上から借りた銭繒を数える侍女

(山王寺絵記絵巻) (和泉市久保記念美術館蔵)

中世の大金持ちの代表として高利貸業者である「借上」がいます。室町時代になると高利貸業者は一般的に「土倉」と呼ばれるようになりました。

### 中世信用システムの解体

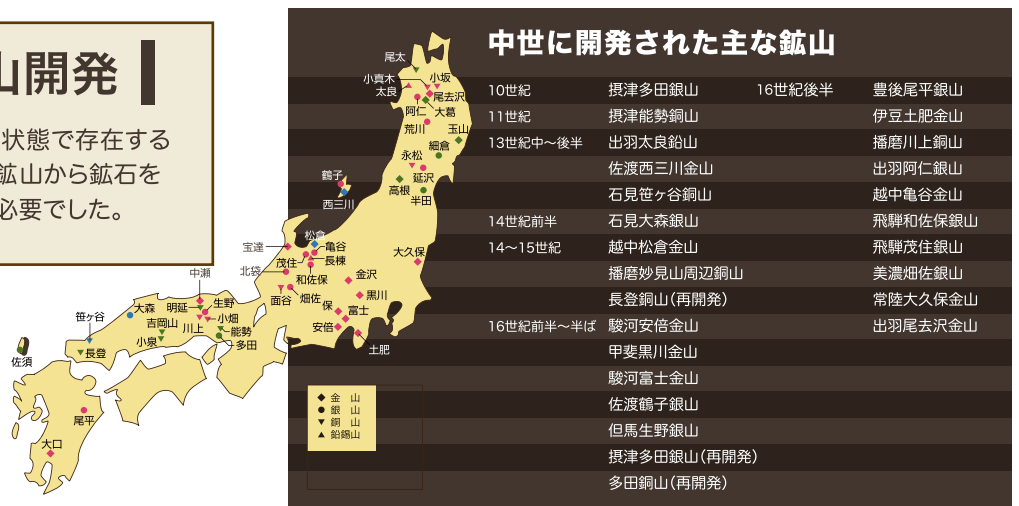
16世紀になると割符は姿を消し、その他の手形も狭い範囲での取引にとどまりました。現物輸送の負担を軽減化、省力化するという手形の機能は金や銀に代わることになります。

# 金属貨幣の原材料としての金・銀・銅

中世(12世紀後半～16世紀後半)の中心的な金属貨幣は銅を主原料とする銭貨ですが、16世紀半ば以降、金貨・銀貨が登場しました。金属貨幣の製造は原材料をうみ出す鉱山開発と密接な関係がありました。

## 金属貨幣と鉱山開発

金銀銅は、自然界に純度の高い状態で存在する場合もありますが、一般には、鉱山から鉱石を採掘し、金属を取り出す技術が必要でした。



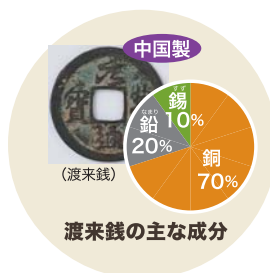
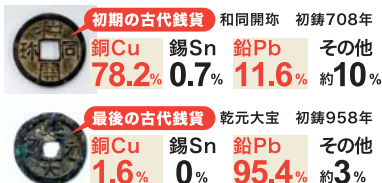
## 銭貨と金属資源

国内での銭貨の铸造は、10世紀半ばで途絶えましたが、14世紀頃から渡来銭を模した銭貨が作られました。これらの成分分析により銭貨の原材料と国内の鉱山開発の関係が明らかになってきました。

### 国内で作られた銭貨と金属資源

#### 古代銭貨の金属成分＜金属成分分析＞

国内の鉱山では、9世紀頃から銅が枯渇し、鉛が多く産出されるようになりました。そのころから古代銭貨も銅の成分が少なくなり、鉛が多くなりました。



#### 鎌倉大仏の原材料は？

鎌倉大仏は、渡来銭と成分が近いので、渡来銭で作られたという指摘もあります。しかし直接示す史料は残っていないため、はっきりしたことはわかっていません。

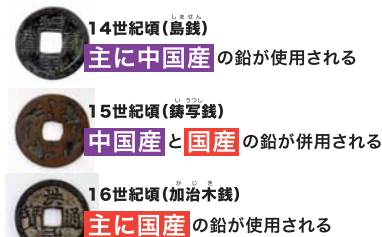
銅 67.0% 鉛 24.0%  
錫 8.4% その他 1%未満

#### 原材料としての銭貨

『吾妻鏡』(13世紀)には銭貨を鑄造して梵鐘をつくったことが記されています。銭貨が銅製品の原材料として使用されることもあったようです。

### 14世紀以降の国内で作られた銭貨の成分＜鉛同位体比分析＞

14世紀後半以降、国内銅山の再開発に伴って銅や鉛が産出し、15世紀の鑄造銭には国産の鉛が使用されるようになりました。16～17世紀には盛んに銅山が開発されました。



## 中世の金貨と銀貨

金や銀は献上・贈答品あるいは工芸品の原材料として利用されていましたが、16世紀に各地で鉱山開発がはじまると、金貨や銀貨が作られるようになりました。

### 金山開発と金貨の登場

古代から中世にかけて、金は陸奥などで自然金(砂金・金塊)として採取されていました。16世紀以降、鉱山開発や精錬技術(金属の不純物を取り除き純度を上げる技術)の発達によって山金(鉱石)から金を量産できるようになり、金貨が作られました。



### 外国人から見た日本の金銀

イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルは1549年、同士へ送った手紙のなかで

日本の堺の港には金銀が集中している

と報告しています。

また1563年来日した宣教師ルイス・フロイスは『日本覚書』のなかで、

西洋人は金銀を貨幣に用いるが日本では重さを計って使用している

と記しており、秤量貨幣として使用されていた様子がうかがえます。



### 世界へ羽ばたく日本の銀

中世において、銀は主に海外から輸入されていました。16世紀に石見銀山で精錬技術「灰吹法」が導入され、その後、生野銀山・佐渡鶴子銀山など他の鉱山へも灰吹法が伝えられました。

こうして、国内の銀の生産量は飛躍的に増大しました。

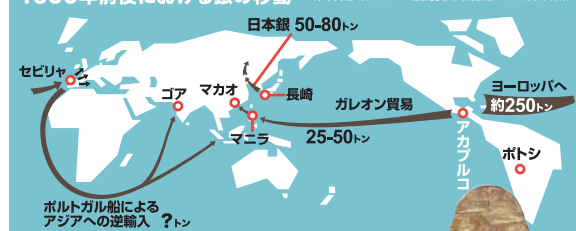


生野銀山(兵庫県朝来市)は、1542(天文11)年に良質の銀鉱石が発見され、守護大名の山名氏によって開発されました。

### 日本の銀が海外へ

16～17世紀にかけて、中国の銀需要や、ヨーロッパ諸国での銀貨や貴金属としての銀使用の増大を背景に、日本の銀が大量に海外へ輸出されました。また、16世紀には1545年の南米のポトシ銀山の開発をはじめ、世界各地で鉱山開発が進みました。

#### 1600年前後における銀の移動



日本銀の輸出量は、アメリカ大陸からの銀の輸出量の2～3割に相当したといわれています。





# 石州銀と甲州金

## 銀山支配をめぐる戦国大名の攻防

戦国大名は、石見銀山の支配権をめぐり激しい争奪戦を繰り広げました。銀山の支配は、大内・小笠原・尼子・毛利・豊臣へと転々とし、その後、江戸幕府の直轄領となりました。

石見銀山(島根県大田市)は、戦国時代の鉱山開発の先駆けとなった鉱山です。

1533(天文2)年、博多の商人神谷寿禎に招かれた技術者が石見銀山へ「灰吹法」をもたらすと、銀鉱石を精錬して銀を取り出せるようになり、この技術が各地の鉱山へも伝えられました。

|               |                        |
|---------------|------------------------|
| 1526(大永6)年    | 博多商人神谷寿禎が石見銀山を発見       |
| 1528(享禄元)年    | 大内氏、銀山を支配              |
| 1531(享禄4)年    | 小笠原氏、銀山を領有             |
| 1533(天文2)年    | 灰吹法による銀の精錬がはじまる        |
|               | 大内氏、銀山を奪回              |
| 1537(天文6)年    | 尼子氏、銀山を攻略              |
| 1539(天文8)年    | 大内氏、銀山を奪回              |
| 1540(天文9)年    | 小笠原氏、銀山を攻略             |
| 1556(弘治2)年    | 毛利氏、銀山方面に進出            |
| 1558(永禄元)年    | 毛利氏、尼子氏と石見東部で対峙        |
| 1560(永禄3)年ごろ  | 小笠原氏、毛利軍の先鋒として尼子軍を退ける  |
| 1561(永禄4)年    | 毛利氏、銀山を領有              |
|               | 尼子氏、銀山を攻略              |
|               | 毛利氏その後3年間奪回の隙を窺い、銀山を奪回 |
| 1585(天正13)年ごろ | 毛利氏、豊臣氏の共同管理となる        |
| 1600(慶長5)年    | 徳川氏、銀山を領有              |
| 1601(慶長6)年    | 大久保長安、銀山の初代奉行となる       |



### 石見銀山遺跡ってどんなところ？

石見銀山は、2007年ユネスコの世界遺産に「石見銀山遺跡とその文化的景観」として登録されました。

石見銀山遺跡は、採掘、精錬、運搬・積出までの活動の全貌や、周辺の森林管理による鉱山経営の様子を知ることが出来る貴重な遺跡です。



### 『銀山旧記』

『銀山旧記』(石見銀山の発見の経緯などを著した史料)には、技術者宗丹と桂寿が石見銀山に灰吹法を伝えたことが記されています。

## 武田氏時代の貨幣—甲州金—

武田氏の時代の金貨流通の実態はわかっていませんが、発掘や文献資料の調査から、「蛭藻金」や甲州金の「露金」のような金貨が流通したと推測されます。

戦国時代、甲斐(現在の山梨県)では、甲州金とよばれる金貨が流通していました。甲州金は、戦国大名武田氏の領国内で産出する豊富な金を使用してつくられました。

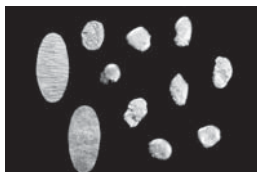
### 金山経営の専門集団—金山衆—

金の採掘には「金山衆」と呼ばれる専門集団がありました。彼らは、金山経営を行う一方、掘削などの特殊技能を生かし、他国との戦闘でも活躍しました。



(湯之奥金山博物館蔵)

### 武田氏時代の遺跡から出土した碁石状の金と蛭藻金



(個人蔵)

### 『甲陽軍鑑』にみる「碁石金」

甲州流の軍学書『甲陽軍鑑』には、武田信玄が手柄を立てた家臣に「ごいし金」を下賜したという記述があります。



「どういほうびとして、ごいし金を、信玄公のぢしん両の手にてすくひなされ、三すくい、彼のかわら村伝兵衛に下さる」

### ふしぎ!? 石から金・銀を取り出す技術 ①

当時の人々は、どのようにして鉱石から金や銀を取り出していたのでしょうか。

#### 採鉱と選鉱

##### 採鉱



① 鉱山から鉱石を掘り出します。



② 金(銀)の鉱石を選びます。

##### 選鉱



③ 鉱石を砕いたりすったりして細かくします。



④ 砕いた金(銀)の鉱物の比重差を利用し、水中で揺らして不純物と分けます。

##### 精錬



貴鉛 灰吹銀  
石見銀山遺跡出土(大田市教育委員会蔵)

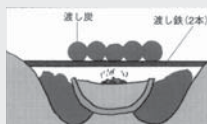
### ふしぎ!? 石から金・銀を取り出す技術 ②

金や銀の生産量を飛躍的に増大させた「灰吹法」は、金や銀の鉱石に含まれる銅・鉄などの不純物を取り除くための技術です。日本では、まずは石見銀山で実践され、全国の鉱山へと広まっています。

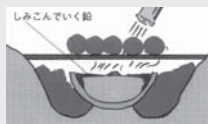
#### 灰吹法による精錬



① 増地に灰を敷き、灰の上に砕いた金(銀)と鉛を置きます。



② 増地の周囲と上部に炭を置き、加熱すると、金(銀)と鉛の合金ができます。



③ 金(銀)と鉛の合金にふいごで空気を吹き付けると、鉛と金(銀)に含まれていた不純物は灰の中にしみこみます。



④ 鉛と不純物が灰にしみこんだあとには、品位の高い金(銀)だけが残ります。



甲州金の背面には、金から鉛や不純物が抜け出した穴が残っています。

(イラスト提供 湯之奥金山博物館)